朝夷巡嶋記第七編 三

113
939
N33

門イ13
号 939
巻 19

朝夷巡島記全傳第七編卷之三

東都　松亭金水編輯

續輯第五

豺狼難義漢非命死　兇賊為陷忠良士

再説腰越獣六郎いかの書状熟と視居るが。忽地堂ゝ礫と拍て。この水弗の文字ふるうて想ひ當てしとこそあれ。尚の漢士ハ北條刀称の。近習ふ在て窺をゐる。湯嶌弗太郎とのゝあるり。在下渠とゞ平生ふ恩まど。渠僥倖ふ吾ゝ紛ゝ逃ゝ出ゝ

のゝ見と想ふ。水弗とい渠ゞ名の。沸と両段ふ拆たるゝ。これば此方の強去てふい全く朝夷主ゐゝんゝ。遮莫朝夷主ハ今鎌倉ふ在もるゝ。渠ゝの密書ゝ携へて。何方へ往く何と謀るゝや。その赴ゝ解しがてと。ゝゝ又さて沉吟とるゝそゝ。かの船頭ふ打扮て。沸太ゞ盤纏ゝ奪ひし漢士。進ゝ出ていゝゝ。吾ゝ綜の様

いまゝれど。朝夷刀称い先の日ふ。陸奥とやらん仕はとて。あの逸戎通らまさう。勿論
將軍家の使ありと。人の咎ふ吹及べき。といふ戎吹て獣六郎。その想ひも掛ざるゆ
うる。若まとそれゞ実言ふて。陸奥へ赴くなら。陷阱の謀ぞ。行つもちゞ紀ふなゝぞ。
危ふゝ頻ゆきて。少も早くとまゝと若ぎん。無越大事と曳さん。夜の明る間も程遠
せんやと。旅の用度浅把出そふぞ。猛八雲時と狂ぬ。足下が胸中ゆとゞゝ。今急ふ
出立とも。途ふて逐着べきふあゝぞ。よゝやその事ゆゝぞとも。然る浅ちるゆ計技ふ。
陷べき朝夷ゆゝぞ。夜明るゞ在下ゆるも。足下と倶ふ逸戎暮して。陸奥へ往べきう。
とゝふ腰越大ふ歎ゞ。志い致をゆのうゝ。年老く要ふさぞ。和君ゆる主侯諸共ふ往
ゝゝゞ大慶ゆう。殊ふ在下い岩井ゆる逸翰と所持ゆすゝゝ。朝夷主が嫌金ふ在
さぬゆゝゞかゝる筋。ゆとも逸戎逐うけて。往ねゞ使の詮ゆる。況て大事と必ゝゝ。
夜と日ふ継で来らんはゝ。去来と准備と急ゞゝゆくとゝふゝて猛八。西三人を

爰ふ狂ぬ。残まる者いゝる倶ゝて。未明ふまゝ戎立出んと。卒ふ旅の用度と聚ぬ。危
角するまふ白こと。東雲ゆゝむ頃ふるれゞ。玄未とて上下十人許ア。陸奥さゝて立
出ゝり。却説朝夷義秀へ。冑ふ縁金と発足ゝく。日なし。在武蔵の国へ入まゞかの
朋友ゆる吉見冠者。まと光仲の領地ゆる。太田の荘も程遠ゝゞ。借ゝ昨ゝらん
ふい立ゝりて対面ゆ。其後のとも遂一ふ。物語ゝまゝ思へども。這回い公の使ゆう。
私事ふ半日も。空くゆるゝ忠ふ行ゝぞ。禹い平世の時ふ當り。三度門を過ざく
入らゞ。況や舊友と訪ふとや。然るゞゝこの侑と過ぎふゞゝふ音信せぬ。義を遺
るふ仇さるるゞゝと吉りんの領地石ケ荘へ。三草太郎五まと太田へ城戸四郎戎
使ふて。這回如此このうとゝ。陸奥へ参るふつき。立寄まくい存ずれども。公務と浸ふ
あまゞゞ死ゆゝゞれゞ。使と仮て舊情を。述るまでふいと。その侑戎ゆゝ金ゆ荒河の渡口
戎超て。彼二人と出ゝ遣て。汝ゆ彼処の要路ゝゞ。順路戎需めて来ゝゞ。必吾ふ逐恙ん

とゝて。山路をたどる渓澗をくゞりて。若光仲弓諸俱ふ来りて吾伐訪んとのふとも。開い強ふ面汐べゝと。逸こふ諭さふをんん。心得ざゝと両個の士。領掌してその所より。道引ちゞくて立別まぬ。朝夷いとまうして。遺るゝ。辛下の雑人のゝ。言葉敵ふあるものあらば。然まべ終日馬ふ跨まで。遠近の山水ふど。己が心のゆく隨ゝ。瞻望やりてもくゞどふ。右視まべ傍ふ一宇の堂あり。その檐口ふ金字ゆて。大聖堂とゆゝと。ゝい不動ゝと祀まるゝんゝまま往昔よりゝの彩像ふ多く結綵のあるゝれゝ。玄来さらうて洋りて徒んと。輿伐引ひけて。徐ゝと歩ませゆきやゝと。堂前ふて馬より下さち。霎時祈念して立あゞり。猶その迩の風景とゝち眺望ふまゝいこれ。武蔵と下野の界ふして。所の名とゞゝくも知れど。山まゝ山の高く聳え。折しも秋の末あまべ。紅栄黄落の梢伐雑へ。そのさまいとも興あまべ思らゞまゝ。徨ゝて。暫く在しゞゝの堂内ふ人の叫く聲きこゆ。朝夷耳をゝ引ゝて。人迹絶るこの所ふ怪しきゝるゝとゝく。ゝふ。正まく人の声ゆれば。倘旅人の疾ゆゝ発ゝまゝゝとふ悩むふや。然ゆゝべ不便のゝるり。と頓て自ら階伐登ゝて。ゝゝゝ扉伐押あけ祝まべ。惣身無ふ深てその傷ふ無の着る腰刀と捨ゝて。おまゝ正まく山賊ふ。逐まゝものゝとゝく祝ゝふ。行李すゞの包ゝもゆりて。引剥ふ遭ゝる鮮ふものゝゞ。何ゝゝ不便のゝありゝゝ。少ゝと傍へ近づき。大音ゆげてゝ旅人いるまべ斯のでき。為体ゆいゝりゝるゞ。乳伐実ゝふてゝ仔細と疾いゝりゝとの聲の耳ふ入ゝゝゝや苦しげるゝ。息と吻て衛ゝふゝゝゝ頭と揺げゝ。眼とゝゝ開きてこゝ伐ゝゝ。朝夷ゝ歯下ふ腰と座ゆつ旅人ゝ顔と覗きて。ゝふ性ゝゝゝゝ三翁ゝゝ如何ふと。いゝふ疵負ゝ瞳と定ゆ。然いゝゝん身い阿ゝゝの。朝夷ゝゝゝゝゝ如何ふ。此処ゝゝで面あゝんゝゝ。今の今まゞ知ゝゝゝ知ゝ。老い涙の脆けまべ。喜ゝきふゝまゞ涙ゝ。身の苦痛ゝゝ人忘ゝて斗ゝ。忽地形と改ゝん。ゝまゝゝ救箇所ふ疵と履て。進退更ふ自由ゝゝゝ。朝夷い携ゝゝ傷ゝ。諸ゝゝゝゝゝ抱起ゝ。什麼翁いゝゝ筋ゝ。此処ゝ海と

呻吟すること如何ばかりなるべき。疵と負ひて氣遣ひと問ふ。三救田欽息して
さてのたまふ。是ふい種この仔細なり。洋ふのえで一朝ふ説尽えべきもあらねど心地苦
しく長くと物語るべき氣力もあらぬ。まづ肝要のことを言ん。先頃和殿ハ鎌倉へ皈り
まして後由功をえて。將軍うなの近臣ふ擇こまされうとのこと。箇ふ腰越生とて書
翰を綸りのひしうべ。判五ふも尾ハ毒ふ。歓びくこと限りなく。殊ふ江の三三廣光めも。
俱ふ来まして言うんの冠者ぶ。ちんすの為ふ救ひまして。石戸の莊ふ湯らしこそ落なく
歓び必えその渾家の淺良井とぶ三三とも伴ひて。更ふ石戸へ皈りんと。是まで長く八
と日ふ。鵠思禀ーエ成謝。旅装とする間ふ。判五をひと叢雲の。時ふ森ー心地
ーて。是より後ふ吉左右を。重ても必んりめと。郷の甲乙喫び集め。嬉しきまくふその
緯のう成具ふ物語を。祝酒とのん振舞ていと張ーく日を送り。そや淺良井も
旅准備。牧をひうとのくまふ。腰越生ふ返翰とまて。まと石戸まで西三人の物持ども

と雇ひ。上下都て七八人。別て成告て立ちまて。其夜子一刻の頃ありけん。強盗
卒ふ押入て。下奴婢女残らず。縄うち結て桂へ繋ぎ。ふるす又と要ふ突立
姿と揚るバ切んとのふゆ。金恐まて震ひ戦慄。人ありとも名乗ぬ。頓て盗
人の張本ある。魔五平とのくるもの。ばり〳〵奥へ踏入て。判五成捕へ行への。黄金と
出せと責罵る。生憎ある夜ふ限て。巴の尼ぶ物中ふ。ふや。胃うり腹の痛ひ
とて。いとく苦ー紀容ありまして。ことと有病て。まくせんと。吾と一人の婢女とふ。彼の
離舎ふとりて。小抱せーが。まく秋中ふ。やく怠りしとのふうり。其侭まを処ふ寝ちも
掛て。同睡ーまく。母屋の方ふ賊の入ーと一点ちく毛。判五ぶ傷ふ田窪姫。乳母ふ抱
うと臥うりーと。是ふ賊い縛ーなげて。只管判五と責るふるうぶ。今い何とも詮
方なく。多くものれど。貯へ。限ーと無えて去せんと。主事と孫ーこん庫へのき。黄
金成ー世ーまべ。賊ぶらこと成奪ひとり。そて判五ふ射ひてのまう。その頃人の

いふときけば。汝ハ朝夷ヶ泰山ふく。長なる女の子ハ朝夷ヶ産の児なりとゆゑ及ぶ。吾ゑ
一昨年朝夷ヶ。爲ふ命を隕しる。山の神魔平太ヶ家。魔九五平と名るものゝ。その須へ
陸奥の。征夷大人ヶ麾下ふ在て。雖所為しるもあざりしヶ。征夷大人ヶ帰ゑ。兄ふ
拠ゑて山寨の。首領となりて彼処ふ居ゑ。兄の恨ゑと報いんものと。その讎と何
ふふ。朝夷ヶ聞て定めふゆゑ。楽い今鎌倉ふて。将軍家の近臣れ。輙くとゑ城
討ヶ。その眷類なる汝ゑ城。討取るまゝ兄への孝艮覚悟ゑよとふう早く。
水ふ弁一太刀ぬき翳。切つけらるゝ且くゝ。支えられども渠い多勢。此い一人の老躰
ふて。おゝ〳〵敵ゑべきなゝず。肩先四五寸斬竜ゑ。嗟と仰向ふ倒るゝ。遂ゑ
刀ふ手を悲やみ。で一刀ふ田鶴姫の。背城両ふ斬ゝ。當下乳母い縛の縄弛ゑ。と
僥倖ふ賊等ヶ双成揺潜ゑ。縁より下へ飛ゝて。賊ゝ〳〵と叫ぶ聲。ゑふ如く
騒ふゝ。駭き目覚ゑて其所ふある。棒ゝ把て泣出ゝ。母屋へ来ゑ。ゑ賊い

その仮ゝて逃去ゝ。ゑゑい判五と援け起し。縛めらるゝ下奴等成乳母ふ解
して遠近へ弛ゑて。老人の介抱手ふゝと尽せゝるゝその深疵のこゝ。ゑふ
命ふ。拠ゑて死孫ゑへゝふ眼前非業ふ死せゝるゝの歎さ。腸断敵骨ふ衝き。竟ふ
明日の晩方ふ黄泉の人となりぬ。巴の尼もこの歎きゝふ。伏ゑて食ゑ絶へ
開ゝ理ふ。ありゝ〳〵。斯ゝて果ゝと練め励ゑ。まゝ西個と野者送ゑ。ゝて。この
る。浅片時ゑ早く。阿三とのふ。ゝせゝるゝ年老ゝれと吾ゑ漢士嫌ゑ。ゝ丈ゑ往ゝ
迹ふ止まりゝて。ゝる飯る目と侯ゑ。尼ゝ兼ゝ商賤ゑ。矢庭ふ彼地ゑ発足ゝて急
けと者の果敢ゝ。ゝぬ道と測ゝて。昨日の暮前の宿ゝ未ふゝるとゝ。見ゝ先い
三里ゝれゝ。人里とてもなゝ。ゝれい此処ゝ宿ゝ。ゝゝ。其所ゝる人のゝひゝゝと忘急ゝ
旅ゝれい早く泊ゝ。ふ意ゝ。ゝ三里行ゝとも初夜のゝゝふい先の宿ゝ行ゝ人ゝと
この林原ゝ。ゝ。この時ふ日い全く暮て物の黒白も領ゝ。道の案内ゝ知ら

朝夷
一三より遣て
往事を
聽く
ひろ

それ前の宿へとゝめて送り。今ここに不後悔あて准備に持炬火とゝ照らしゆく序に後の
棘を〳〵と。音するまゝに不殘きて見れば是まん狼の小笹を下に交尾してまさに西下心西い
ふゆう。吾推をとり出すと。ゆり山跡に入て狼の文尾こんまいその狼何方にても屠
潔ひて云の人と惜さと思ひもうゝきをあきのめと見さうとれと做さやと不定亀りて
一歩も伸ば脚の〳〵太く裏くろ。初て自然狹ひに遭んとも云ふ知何ぞんと云ふ
此方に。の丈堂のありけまいこの屋竟の張ろうり此延そこの夜と所〳〵伺ろ恐れの
あるべきと近ろり見るに動の堂ろ。永未この対信まる明王のいその憑〳〵いさ
さて扉とあひき。裡ぶりて猜と堅くしてる像ゆうも射ぶ祈念ゆして其所に
居つ前の宿ゆて調ろ。饌みを出して食ひ夜の更ゆ〳〵肌寒きも。進へて在〳〵何時と
ろ。歔吸〳〵と間睡をろ。禄の下に物あり。滅雖〳〵と毀を音をこを聚を身我
起しそのまゝと寝ふいとを前の狼ゆて。ゆうこに居ふ我夢り仇とゆ未ろるん

と思へばひとで守も戦慄きて。更に生ろ心地もなく。知何に猛くとも。我も一
個の丈夫ゆると獣の落に咬はまんやと。牙と固めて在りどに。頓て傍の椽の板朽〳〵と
撓倖狼に牙を立て噬こ散し。矢庭に踊り出ふ。ぶ牙に刀抜放ち。ゆらば
砍んと待蒐こまば。不得に左右ゆ。ゆも。眼と怒ら〳〵牙と噬こ爪と磨
こて躍り狂ふ。所に。つきて亦一匹。後の方より飛つくゆ。ぞ。や是まぞと力戦究竟。
前ゆる奴を発矢と砍まば。一声高く叫びも敢て。椽の穴へ逃入間ゆんらをどく
三四箇所。衣のうへより咬ひつるまこて。痛こに堪ぞ膂力なくれど振向て肩のあうと
斫〳〵と覚えて俯きなるが。更に其後のこに知らぞ。皆くなつて心づ死者まば渾
身に滴る鮮血。その疼こ堪ぞこて。牙戦動ろこと。ゆ〳〵かくていまゆ終ら
んゆとも尊とき明王の。廣前で死めゆ仏縁の辱〳〵といへば。この一條と所の三
どの不告ぬるこそ妄念なれと。今盤に隙こて丈とつこ心掛ゆに思ハ〳〵ゆひも

かけを和殿ふ遭て息あるうらふ物いふことを得るを尊とる冥王の加護あや
あゝん奈ーと。長物語の苦痛の辭。朝夷一什と叉ごふ。或ひい悲こあるひを
怒っ。う得ふ猛き心ふも涙い滝と止めあへを悲歎あるうさるけまども。過ることを
い今面へかくらを。まゞ差當るこの疵負。及いのまそも療養のを要ることを肝要るれ。
と持合ーる茶をあゝえ。着替の小袖何らとと。納て早せ長櫃と。開て東西を
把出ー。とまことば袱ふ包ませて。偖かの明る唐櫃へを〜一三をりいまて。両個の
下部ふ舁擔り。宇治江の邑ふ到るこの旅店ふ冊き入まこ医師を招き種こと。
心を尽して労りまどの太く心と労せ〜るふ急所を噬まてとるれば茶功をりて救
ひ〜〜竟ふこの曉方ふ果敢ゑ〜息の絶ーる。朝夷三郎義秀い恨ふまど
と始めより。思ひながらも千ふ一ふ侘る術もの〜ん名と忍と盡せ甲非文ふ。
かの一三が枕方ふを又きて吐息吻き。善悪自然報あり。賢さ人の言葉こそ。

寓言ふ似るるる。この一三ふ限るて。悪死嗚ると竟ふ叉ふまこ〜〜ゞ身ふ取て。
家旅を及ぬ信切実義人を救ふを楽とーて。祢その身の栄利とるる志。現ふ善
人とも称すべき性あてゆしと奈何るれば。獣の為ふ命と損る。所謂前世の宿業
とい。とまこ笑るのをといふやあゝん。仏説の如く人死ーて。まこ来世あるるゝば。這
回ハ王ハ貴人とも。生る果報殻ひる。南无阿弥陀佛弥陀仏。唱へて頓て宿い
主ふ。指何らを浅桃ら〜て。その明の日この為の香華院へ莊まて。布施と数多も
僧ふ贈る。讃経慇懃ふ吊ひけ。かくて朝夷ハ二両ろの砂金と旅店の主ふ與へ獣
の所為といひ〜。彼堂前を稼しれば。浄めぐ〜ハ洗ひ清めまこ破まこる板と張
久。彼処と守護する僧わ〜ぶそまふ裸せて経を讀せ。明王の憤ことを祈ゆよまいる
雑費ふ充よりし。吾猶とふ迂まりて。まこるのとを計らひてけまど。将軍家の使
なまば。長く遅るべきふわ〜ぶと。逸こふいひ含め。その明の日発足して。陸奥へと

到つまろう。粤ふ湯島沸太郎ハ思ひもうけぬ路用を奪ふまで。大ふ恥と暉うせ
ろど。密の使ふ立るまれば。文とも忍びて這こふ。彼如とこち出て。着換て活て
些さろの。殘と泛て盤經こう。夜と日ふ嗣で走るわどふ。日ふ〳〵志陸奥人
到つま着き。磐城へ出て案内とう。北條力称うり密の使ふ。ありこるうーいひ
いるまべ。盤城四郎時直ハ。何ゆうりやと自分こち出ぐるふ是ゆん紛ひるゆ湯島
ふ〳〵ありけまべ。まつ此方へと案内こて。閑室へとゆるひへま。長途のつうまと
屋労ひさて。その使のう戎間ふ。依初ゆ〳〵知大事ゆまべ傍の人と遠さけゆと。
侍女ゆまで退う〳〵声と低ゆて在下ゆ使ふ立〳〵如此こうり勿論その毛義時
君の密書と授ひひーゆ。箇様その次第ふようて。盤經と共ふ失ゆひつ。
心苦〳〵さ限りいるけまで。文神都て隱結と用ひ。餘人い看るとも解すべ〳〵
と義時君の宜へべ。聊心易きうりと。綷洋ふ演説すれば。四郎時直ハ畢ゆ足

下戎使節ふ立らまとれば。別ふ書翰いなくもあまと。然ゆ〳〵假初ゆ〳〵知大事
の密計ゆふりて。そゆ證ふ書翰とゆ。據らまーものと覺ゆ。然るとゆ途ふて
憶ゆき。災難ふ遭て失ゆはまーハ。足下ゆ兼忽ゆるものゆ。いよ〳〵隱語を
ゆて記ゆまーふ。相違なくい心易ーふ。そその密計朝夷主僕陷阱の計策ハ。
とれふ似れど行ひゆけん。足下ゆ言葉とゆて量ゆふ。うーや途ふ一両日の猶豫
ありとゆ翌ハ此地へ到着せんと疑ひゆ。さればその間疑うーて綷と計ゆふ
甚便ゆ。うーや執權の密意ゆうりとゆ。時宜ふ就て計ゆふ若ゆ足下い奈何
ふ思ひゆふとゆ。ハ湯島点頭て。貴所の高論ゆゆ意も同ゆ。元来かの朝夷ハ。
尋常ゆる者ふあ〳〵志。粗その噂ゆふ聞ゆ。元来かの朝夷ハ。陷いれ
んとする時ハ。却て渠ふ見透さま。綷と强ゆるのこゆ〳〵。ゆよゆき珍事ゆ出
来ゆんぞう〳〵思維〳〵ゆと。額と合せ考と呑て。種こふ商議すまと。元来

短才愚蒙の徒胸中さゝふ昏迷して。徒ふ労〳〵て。吐息吻てゑ戎又きゑ案ふ暗さるその折さ。咳二ッ三ッすして。間の隔紙用るのあり。西個ハ忽地恍然し。孩きてうんかくるふ見ゑん當所の陣代ゆて。阿武隈太夫ありけるハ。堅城四郎ハ頬ふくらし。汝何者の要あるハ。案内もなくて。来るこハ怪奇北條大人より。密の使節ふ立れる。湯島生とい人より。吾ハ兎もあまと賓客へ。礼ゑ礼挙動ゑるべ〳〵と。嗜ゑゆらまて阿武隈ハ。そこ処へ坐とトめゑ戎つゝえて。在下刀称へ密談の。一議ありて来り〳〵と。鎌倉よりの使ざゆと物潭らゆて在もときけばうち驚ゑうゑゆゑ浮ゆて次ふ控へて果ゑ戎候と。良半晌の後ふ及び。ゆとゆゑふ耳ふ入る。その密談ハ朝夷と陷いゑべき計策と。主客で兎や角案ドゆゑ。然りとのどもかの和郎ハ。既ふ當国ゆて本事と成り。古今無双の猛者ゑるとハ。牛若童も知りめるとゆ。あり〳〵ゑ渠き和郎ゑるまハ。計らんと。謀〳〵

然ゑふ在下忽地ふ。一箇の奇計と案ト出。見ふ起こるとのじと。胸まつ頬りふ踊るまで思ふ。ゆゑ〳〵賓客の在ゑるゑ戎知りゑゑ〳〵いゑで遽ふ告んとゑ。ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ糸らせゑる。无礼ハ赦しゑられと。陪れハ湯島北叟咲ゑ。盤城の大人とゑ個ゑ他ふハ。洩さゆと思ひ〳〵と。凝ゑる思案ふ沈高く。既ふ足下ふ知〳〵まゆよゑ。然りゑ〳〵〳〵そまふつき。奇計ありとハ何より重畳若縛ゑゑハ北條刀称へ。恩賞あゝせん。頻〳〵それと。ゆ〳〵ねと。頻りふ膝の進むと。見えゑ。まと時亜も緒共ふ。本来〳〵それと。ゆま欲と。顔うち成て。問ゑどふ。阿武隈ハ形と改ゑ。その計策ハ他ゑゑ。今刀称の左右ふ侍らゆ。且暮寵ゑ〳〵ゑふ。處女磐ゑハ其始め。在下ゑ家ふ在〳〵と。離ゑいゆて側室ふと。乞ゑまゑふ。ゑゑもこの春ハ皷へ上てまゑりハ。二ゑき者と思さまで。既ふ内室ふゑゑんとまでこの頃ゑ宜ひつるゑ。その素性来歴ゑとハいまゑ刀称へ言ゑハ。ゑゑ在下ゑ尼介の處女とのゑ。

べ。渠ら先亡の賊主経任が一二の者と称へらるる。鉄盾矢藤五が妹なり。弟
て矢義五経任が所業を見限り、かの山寨を独退くと云ふ至つて遺りかんを便
なく思ひ。携へて出ーるどもの中先も定まらぬ妹と俱せいいのよ〜便り。
ちふ於て在下が家ふ訪来て竊ふいふ。吾と足下い竹馬の友ふて互ふ跡畧
なりしが。且不良の心を起して。経任ふ属ーり。胡越千年の隔てを匿今窮迫
の時ふ臨みて見ゆるとの面みけまど吾経任が所業を踏て。今霄脱ふ山寨戍
去りぬ然ーとのへども国中の人民吾を恐るるふ。ふい足を往めづる。他郷へ
走りて非を改めぬ。ゐと脩めんと欲すまども。何方とへる宛いず。されば是なる妹
の磐を。彼処へ遺さい不便さふ。是まで伴ひ出れど。一所不住の身ふ於ていよよ
ゐ足を纏ふり。足下在下が非を宥め舊友の情と思ひ給へ今ようまふ
閣て。婢とも倣ーのふ〜ば。莫大の鵠恩なり。この義況誘ひ給へまと。餘義もなく

のふふり。今ようその非を改めんと言ひ〜覚束なけまど。窮鳥懐ふ入時ハ。
猟夫も是を捕ふとの。況て婦女子一人を。報ひうとも何やどの害ふ与んと是を
憐ふ快く諾ひて家ふ畜めおきいーが刀称ハこを我れ多ひてその容色の艶葉
なるを。悦びゆひて側女ふと。命ぜらるる其意ふ任ーは館へあげそれひーが。彦ふいふ
川ぞちい川で果るのあるひふて。矢義五その非を改め。押宮ふ入へ詐偽て黄金の
柱を盗うとを是ふりて伊豆の国。大城ふるのて義秀ふ誅せ、まーとふ凡文。
隠まるるゆ。ふるゐとふ。怒を嘆ふ窮ふ恐ふ嘆きその頃在下ふ言ふ。妾果報
の拙なくて女と生まー甲斐なさふハ。現在兄の敵なる。朝夷義秀ハ縁金ふ在
とーあまど一太刀も恨ゆるとのなーずーて。餘所ふ見倣を朽惜しさ通ふ壮夫
ゐとなるんふいいを敵を安穏ふ。活かんと是と歯を切ふとーち歎くさるい雄
なくまま憑ちくもふひーらと。固矢藤五いかりけるき。罪を犯して縁ふ伏ま

朝夷こまごと戮すといくどもあまこ実ハ天誅なり。爭怨むるとあくんと。諭ー
ふけまど女子心ふ。猶朝夷と切ふ恨こぬ。然さば箇様こふ計ふまこ鉈こ
とのひ含めて。縡を行ハまるるーば。万ふ一つも仕損ぜべるば。縡十分ふ仕課せるば。
鎌倉殿の換前使と。害ーこうとのふと名とーてまこ磐ふとるる者と見ば。
密計ふ、なる三個の他ふ。誰こ一人ありるのあくんとの議い奈何ふと洩ーこうふ。いふ
と湯島ゆあくまとの計策究めてこう。阿武隈ーくも考へなこうと。称賛ーく
般若城と祝ーくへ。貴所いのふと問まても。怒城ハ兎斯の言葉もるく。今俯て
黙然ーれば。阿武隈そまぶ心と察ー。刀称ふ磐ふと慈こ。ふふるくて其心
決ーくぬると見ええる。こで一臭婦ふ愛恋ーて。この計策と失なハ後の崇も
獲才影ーいたせも敢ぞ湯島も口と揃へ〜ふるるく。今きく処ぞ妄ハ強
賊弦宿の妹とるや。渠賊心いわ〜ぞとも。既ふ刑除の者なると。愛ーのふハ惹

非なり。曲てこの議ふ従ひ久。砒霜砒石も貯へざまべ急用ふ備へべこう。豫く
そまこと。ふるまぞとも。既ふ砒霜と畜ひるハ。切とえべき貴所の僥倖。ふこ心
を煩ハー。痴情ふ惑ふとうハと。説諭さまて忽地ふ時直ハ頭と擡げ。かくる條
ふやその始め。吾阿武隈ふ乞ーと。渠ハ聊仔細ふり。吾傍へハ出ーがくーと。
るとも。必入まべ。只顧乞て側室とる。かの唐帝の故事ふ〜ねど。天ふ向ふ比
翼の鳥地ふ向ふ〜ハ連理の枝と。契ーて已と今更ふ刺客とるさんハ心ふ忍び。故ふ
彼是黙止せーがたくる処ふ。道理その浅ふ従ひうさんのこさいまこその計策ハ阿
武隈ふきふ教へ。吾ハこ何ふも。知〜ぬ分ゆそあるぎなり。既ふ決て三人。且く酒宴と催ぶり

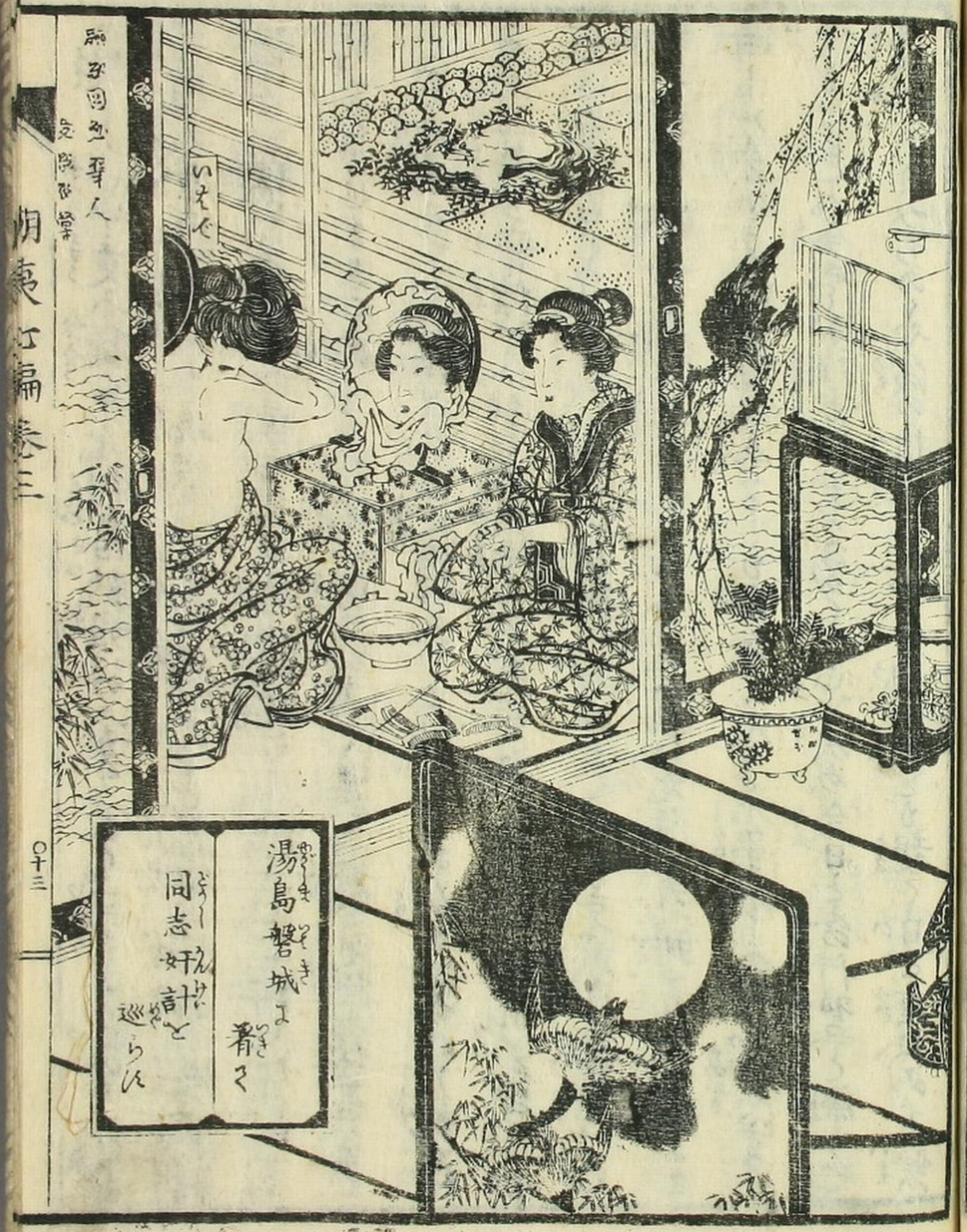
續輯第六

美人一曲鑠鐵心

饗應酒飯畏蜂蠆

かくて朝夷三郎義秀ハ。憶ふくも一三翁ぶ事ふ就て滞留せーも。一日の間ふ用

あん食
明るれ


いそぐ
湯島磐城に著く
同志奸計を巡らす

は果しぶ心中更ふ穏るゝ。判五田鶴姫はいふもさらなり。一三もまた此のごと。元
所謂天命みて人力のうく及ぶべきと。再三回思ひうくゼと。恩愛の情胸ふ逼り。哀別
離苦と欲るとて。日来の勇気もこの時ふ。半摧けし心地して。立も懶くなりあぐる。
斯ているゝと乳と励まし。その明の朝こそとうく。道へば駒の足捻ふ往昔らるく
とゆく序ふ。さても岩神る巴の尼のかるゞゝとハ兵ちまぢ。今こそあれ日数を経
るば。一三翁が音信と。今ゝと候任のうん。あらま城戸水草のうち。何まるりとも
ちふあらば。そのよう書輪と齎して。ぞ祇へ遣んものと。そまさへ武茲へ頒きりて。
跡ふ遺るい雑人のと。物の要ふろのるまぞ。これば先陰奥へ到ると著て綽を
済し。次才ふりて岩神へ立るとも害ふらん。さ老年ふ少しの間も。物ゆ公るい
便るけまと。今さゝふ詮方ねぢるりゝと心と決め。今日と歩行習と凛りて。
再び眼ふもみちのくゆ。後の折磨とぞ。ちゝ川の関とも起ゝ日と重ね。ゝふ繁い

城の守護職る。四郎時直が館近くより。雑人と走らして。如此このうゝ云せ
けまば。然りとて時垂い衣服と改め。陣代河武隈大夫と始め。侍分十八人。路の傍ら
据して。威伐と刷衣並居り。朝夷そまとうるより。馬より下て徐ことゝ孔が
候へ立侍て。在下ハ和田の三男。朝夷の三郎義秀なり。這回陸奥。磐城ふ於て。疆
界の諍論あり。守護地頭の面ふ決し兼ら仔細あり。遠く鎌倉へ検断使
と。云るふ在下とて。その検断使ふ下る。委細ハ逐と兼りて。其可否
決せべ。然るべき旅館と下知して。案内とのされよとのふ入こ頼著とり。四郎
時直はゝと。義秀が前へ臻て。在下ハ当の所の守護四郎時直と申るものなり。
宜ふぞく疆界の論。百姓ゝのふゝぞ。諸士の荘園も雑ゝて在下ふ計らひ
ぐゝ。因ゝハ裁と作ぐの處ゆるば朝夷大人その任ふ撰まれ。長途の下向
先りて尊粧ふ恙ゝ。到著のぞん在下ふも喜び存る処なり。勿論ゆ日禅

倉ゐ。その曲通達ひしひしと。昨日今日とい思ひ入れど。迎へ奉らぬ礼礼とぶ宥恕ゐ。ゐ入りれ此処を渉い片鄙ゐて。旅館ゐ充べきゐ。ゐも稀ゐ。物不自由ゐい思ちくけまど。僥倖在下ゐ家い廣し。且この以来衆人と。集ゐゐも便ゐけまぶ。ゐゐ茅屋と仮住ゐ。旅宿ゐ定めゐくとりゐ。その詞の慇懃ゐまぶ朝夷もまゐ袴と尽し。頭て人ゐの案内ゐ任せ。かの時直ゐ波へ到ゐゐ。ゐゐ構へ厳重ゐて。外面ゐ〻惣陽あり。玄関書院客房ゐ。廻廊と渡ゐゆけば。庭の在ゐゐ種〻の。奇石と置ゐて山ゐ。目ゐまぬ樹木枝ゐ交し。泉水の廣ゐゐ。侍ゐい橋と架。小舟一艘と浮めゐ。已ゐ時とて築山のかゐこゐさい暗の夜も照ゐおゐゐの枫の黄葉ゐ弄ひゐゐ山林の技撓ゐまで熟しゐ。その気色いと真あり。まゐ開ゐねど雨障子と架ゐ〻ゐ花檀の案或い水仙山茶花ゐど。時浮ゐく咲ん風情とゐせゐ。朝夷い元風流ゐとを好めゐ乳象ゐ。ゐ〻れば眼と止むゐゐ〻ゐけまど。心の裡ゐ〻ゐ。時直ゐ俸禄限ゐまゐ。ゐゐ騎奏の景勢。問でも知ゐ。百姓ゐ。貴と絞ゐて已ゐ身ゐ栄曜ゐゐもと覚えゐ。いと憎むべきの狡者ゐゐと。ゐ労ゐゐの也〻まゐ。損て実ゐゐ間へ入まば。阿武隈太夫と其處ゐ。ゐ〻ゐ〻。見ゐ刀称の慰いゐゐ。容房ゐそいと。頼著ゐどゐ朝夷もゐ。ゐ〻ゐ〻ゐ。釈ゐゐ。衝と上座ゐ。ゐゐゐれば。盤城以下の面ゐも。頭て端近く坐ゐ下て。甫四長途の労ゐ慰。備ゐゐ弾論の始めい間様。それゐ。如此ゐ。ゐゐいと。粗ゐ演説ゐまゐば。朝夷逐一ゐ畢ゐ。その次第い大概ゐゐ。然ゐども其人ゐ。親近正ゐゐ。ゐゐ。その是非ゐ辨ゐ〻ゐ。ゐれば。明日黎明ゐ在下彼処へ参ゐ〻ゐ。ゐゐ〻ゐ。知ゐ〻ゐ。ゐゐ時直畏ゐ。阿武隈ゐゐ。ゐ〻ゐ。觸文ゐ出ゐ。當下朝夷を歓待べき。准備大ゐ。ゐ〻ゐ。ゐれゐ。かの廻廊の方ゐ。ゐ〻ゐ。ゐ性ゐ。ゐ持出ゐ。珍膳美味い賑ゐゐ。ゐの席ゐ。ゐ〻ゐ。然いゐ。時直ゐ盃ゐ揚。朝夷ゐ勧ゐ。

あの頃の脇氣ふよう。酒もさのみ欲るれど。使節と食後をと辭んも心うと。
二三杯と傾けて。丈〻へ酌と夫〻まと甲乙より是と勧む。辭さるとすれど敵ふ大勢。
此方は一人その人ふ酒量とき〻強けまべ。固くも辭まで飲いどふ。はいま十四五杯
傾けられば。脇氣も聊散じて。快く覚ゆる。猶数杯と喫しう。秋の日ぐの
さうげる。四下も暗くなるふよう。燈臺数多掲げ出し。真日中の如く燈火と照ぶて
頓て酌酒ふ。主客十分の醉と覚し。膝さ崩る斗さまう。當下時直扇と披き。
詭ろ袈裟とうあげて。朗詠と謡ひて。少〻立舞ふ風情と做し。偖朝夷ふ別ひて
の人ふ。大人ふ對して元祿とも。思ふべけまど是ひこまと。和と以て貴しとする。酒の所爲
ゆえ〻ぐ。今宵は都て許りて。在下一人の妾なり。名とび磐てと呼びいぶ醜くけれ
ども絲竹の調べふをきく巧をえうり。かく言さばこぐ佛ぞるしとて法るうと。是
さまんとの恥くけまど須臾ふさも渠ぐ類ひ多くはあじと思ひ侍るなり。旅中の

慰さるふこまと人ふ召て一曲と奏さまんといひけまど朝夷かるとてば好まぐ。苦笑ひて
回答さぐまぐさるぬ先ふ阿武限ふ小膝と進めてこまぐうれ。興ふん頓こ。辭ふ是ひして
遽さる。朝夷是と狂めんえふ思ひひけまどふの輩ふ志と喪るひて。奥と醒さても元
益ふ似う。好も可も容うとりて。大海のやうとの人生。その溺てと溺まぐうふ。名の
心ふ有り。強こまこと是まんやと思ひ返してあるやとふ。俄て准備やをうけん。女の童が
二人て捧げのて来る琴一面。主の傍へ閣ふ。続きて俗こ出来る。その年十九ふ二十
計ま。金襴頸巻と身ふ纏ひて。その嫩弱なる行粧ふ沉魚落雁羞月閉花。唐山
人ふ美人と讃える。言葉ふ有のふい揚柳の條ふ咲う接のでく。まさ是牡丹ふ梅ふ香
と含ませる風情あり。その黛ふ遠山ふ今没かる三日月の雲妻時なりまさ小袖とうた世。
朱の脣愛敬づきて。綻びかる海棠の花の色ふも髣髴ちう。浮の朝夷我秀
も熟と祝てこまぐ。多くはぐ美人なり。昔詣ふひ傅ふ毛嬙西施もかく

やいあらじ然れハあまかの白居易が傾城傾国の其の色にハ遭ざらんに若じとかいふ。嗟忘るべしくと心に暁て自若として其の為容を起居るに態とハ少し會釈して膝の辺へ玉琴をひき寄してちゝらかいと仂なく侍きとも。鎌倉よりの使ぞかし。飫侍よとの主命を辞ミがたくて阿容もせず若刀祢原の思ふらことさへ愧ぬ挙動と鳴濆とを呵されんと徒る琴柱ハ時にあふ秋稍闌て居ながらの。こちろ容にも似るべし。頓て調子も愛敬の溢るゝばかり紅の口を開きて今様と謡ふ一節青陽に溪の戸出し鶯のその音なすらハ秋の雅の艸葉に集鳴鈴虫の声までもなくぞ聞える。集会る人々数回称賛して首傾け。或ひハ頤を突出して。膝の進むも覚えぬまでに恍惚て餘念なし。就中時座ハ一入笑壷の會に入るいと誇なるに坐中を見わたし。まだ眦に磬とて人ぞ荒示をと微笑のミ朝夷ハ当下あや十二分の酔を発し。日来の性とて是等の事を。

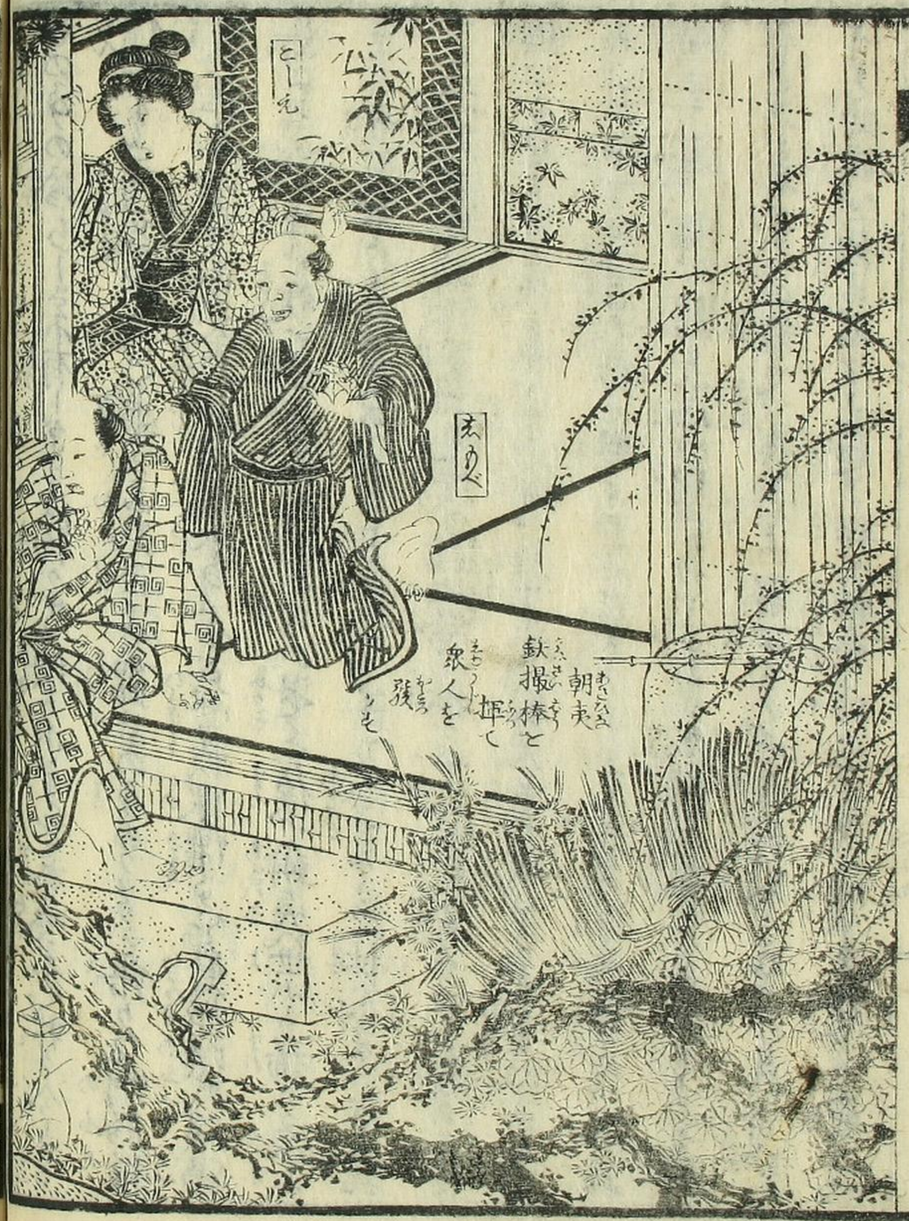
五月蝿とハ思ひながら今更に酒嚥の興さけんぞんか本意なしと思ふものから果るを心憂すで侯れど。ふ頓て曲を奏で畢ぬハ。やがて身を起して時直に対ひ。偖も今宵ハ思ひもうけぬ種々の食膳に遭まゐらするぞ。心ならずも沈酔すり。就てハ長途の労さへ身に添ときおぼゆるなり。をや暇を賜へかしといふに時座今宵時し強めても猶辞むによりさらバとひて是より八間隔ちて奥まりたる畳七八畳敷なる所へ侍女をして誘ハせ。謀て傍に敷設る床の辺へ人燈臺と。引侍せなとして出んとに。當下朝夷呼しとゞめて我が従僕等ハ。旅の調度舁さへ持来れと傅へてよといはれまじが。かの侍女等一やうにかしこまり。伍倶の人ハ表座敷で酒を給べてゐひしが。貪酔て皆小憩ミハ持来るめの待るのみ。それ〳〵運び来らせんと答て朝夷うち笑ひ。館の東西ハ鬼まれ角まれ。坐右へおらでハ快く眠られぬ品なるぞ。それと此処へと差よまり。汝等両三個して。

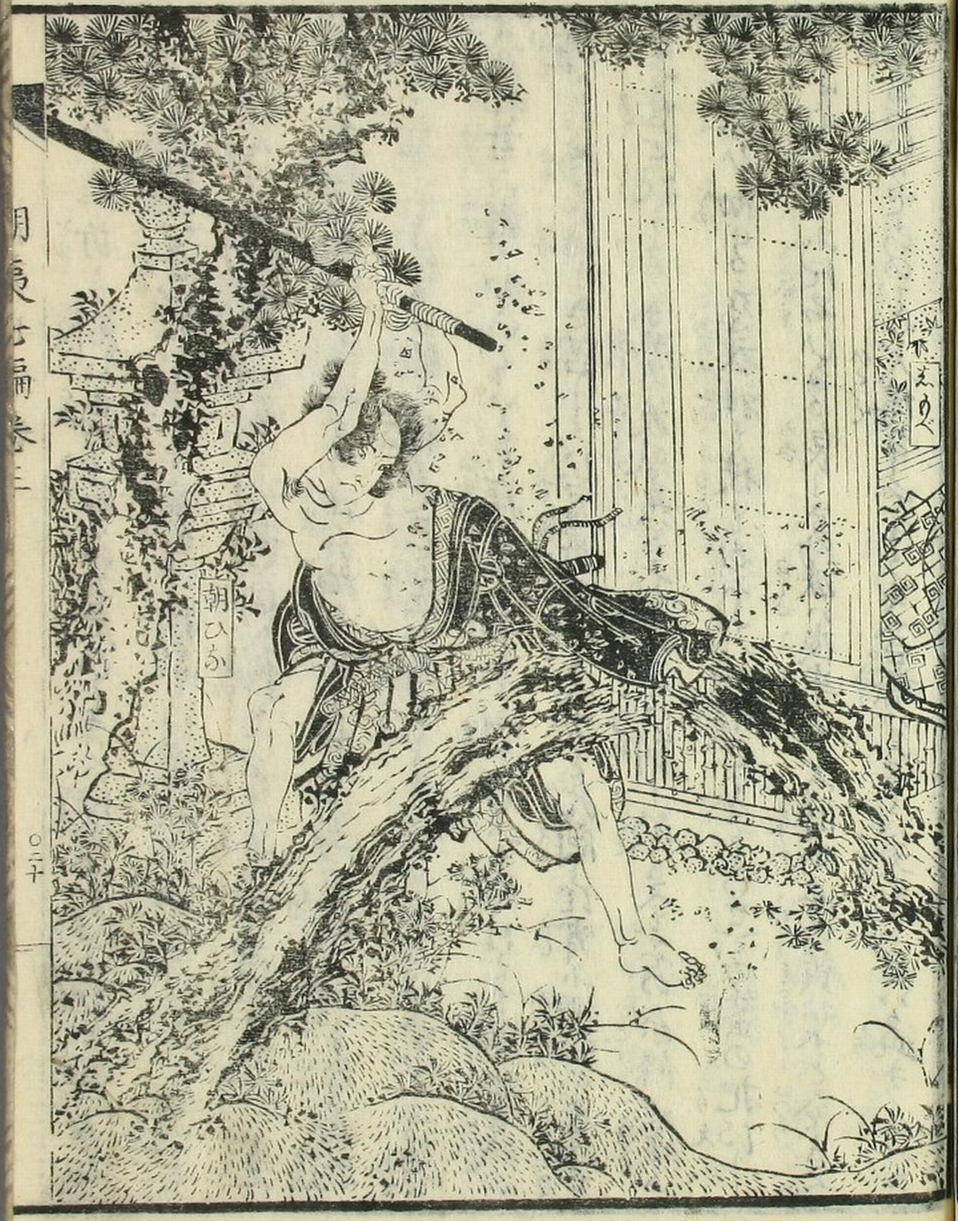
よく持来んや然いあるまじ。まづ試みに持て来べし。その東西に細布の帙に収めたる長き物あり。凡い汝達が背ならんと。説示されて侍女共は。たちまち彼処へ走り来りつ。ひらくに果してその東西あり。見るめもとめ前後に手さぐりをして持んとすれど。その重きこと巖のごとく地さへ離るゝ。とあけまどは搖ぎいよ〳〵離し。侍女共い顔見あはせ。互に呆れて云ふまう。僕に居る怒城の小奴等。そもそと何方へ持ゆくべきぞ。力を貸てんとひて倚てをとりあげ。持んとするに〳〵及ばざるにもこは何等の品ぞと倚の外より。あらして探るに一條の棒あり。是は正者の識なん。朝夷主が何ぞの要ゆせんとて齋しる。現に長旅の厄介のものと或ひは謗ることもあれ。誰も来よと彼も来よと人四五個とゝび集めまの〳〵に持ゆけて肩ふりて侍女の案内によりて朝夷が卧房の倚へとて来りつ。聞てえ居る。仰の品と持て来りぬ然ればこは何等の料にとて齋しのべる。

僕去年鎮西の祭祀に四十二貫の石を挙て邑に三とゝろき膂力持の名を取りし漢士なり。今日いとまの〳〵刎口なり。何貫ぞ。いざやとのに朝夷微笑て伺ふやあり吾も初めは汝が人並に勝る膂力わりなくぶどて是をば持ぶる使ふことを雖り。挙るゞ。今一回持てえよとのたまれてまさも懲ぞなり。こは力を究め挙んとすれど更に動ぜざる面を赧うし腕を撫摩まつ。ひく。及びいり。但和君い一個して。特参ふる不審。首を傾げて問やぶ。朝夷働こと五出ぞ。袋の紐を解きすゝと曳出ふその形い八角にて。文木の方と細くその先い次第に太やなる。鉄撮棒にてありけまば小奴等い膽を消して。昔結ぶ梁山泊。大江の山の鬼神にあらずば水滸傳なる花和尚が鉄禅杖を携えん。画にあるのを眼前に始めて拝る鉄撮棒。和君い使ひ給ふ。真にうゝも是いとまの人と成るの図思君ゆやなどつるのと咲くと。朝夷いまは敢ぞ呵〳〵

とうち笑ひ。汝等已が分量をしらで。人を侮りてあるまじき使ひに堪ざる東西を齎し為
の用に備ふべき。猶疑ハで酔醒しの興に一揮本事を見せんとてひぢをはりつゝかの
棒をぱしと握こき引提て。椽より閃りと跳り出。廣庭の真中にて。鉄撮棒を使
ふに。宛然蒼鷹を扱ふがごとくうち揮るたびに五六歩。空気の音さへ響ばかりに小奴
等ハいふも更なり。侍女どもハ恐をなす。什麼数千の膂力なりや。凡人にてハあら
ざりけりと。舌を捲てぞ戦慄ける。朝夷ハ思ふがまゝに。半晌ばかりうち揮て。此頃
久しく膂力を試さねバ。覚束なく思ひしが。さりとて衰へたるともなし。嗟快し。腹も消
化ぬべしと。恕なくかの棒を。閨の壁によせかけて。その侭に臥けれバ。侍女小奴ハ眼と
告て。障子ひき立て出てゆく。朝夷ハ頓にも寐らざれバ。心の裡に思ふやう彼等に対
して雅なくも腕だてせしハ烏滸なれど。罵詈てもくも罵りをこらすバ暗にわが威を示
さずハ足ざらめ思へバ。よしなきことをなせしと。慢に悦び思ひたり。かくて件の小奴等ハで

そのみの珍らしさに有しがまゝ残物なり。頓りにまとと咎咳して。祢ろ人々と寄
信せしまゝ侍女等もおのく退きしが。奥へ至りて如此ありのまゝに語りしかバ。阿修羅
王の化身にもあらざれバ。金剛神の再来ならんと。只管戦慄懼ておとなしく。城の武隈湯
島など。名を耳に欹てて。いひしと聞ても。嗟く恐しさに。朝夷ハ世にも稀なる猛者
なりと。嘆てハあれど斯のごとく。おもひ居たりしが。侮るべからずと。壮夫なりとて就
ても阿武隈めしの計ひこそ一段なれ。北條刀祢が平生より。思ひのまゝに無理なるさ
然ハあれ敏き者ハ心雄くあらく。万に一も仕損まじ。この強者が腕ぞとも。今宵限りと
あらざる愚なさ。嗟笑止やと顔見あはせて甘りくと笑ひ居たり。千葉盤若ハ阿武
隈より。逸く謀を授られて。心の裡にかやうくと。その為様を沈吟す。夜ハ更ゆくを俟
ほどに。はや子の鐘も聞えて人々ハ寝定まり。四辺寂寥となりけれバ時分ハ
よしと。回廊を抜足さしつゝうち廻りて。頓て朝夷が臥房へ至り。障子の透より窺へバ。


朝夷
鉄撮棒を
振て
衆人を
殺す


朝ひら

熟睡たりや折ふし剣の声の聞ゆるに思ひしよりハ便よしと心に歓び懐る。匕首の鯉口を甘げながらてまた妾時裡の声と窺ひて徐に障子をひき明て。片足を入れバ朝夷ハ寐返りして眼を開き物をいハで是を視る。秋原ハ坊とりんるよりも猶従然と歩み行より。横の袖にうちかかれバまづ妾時ハ洞え出さん物思ひしくありけるが頓て袖もて口を掩ひ鎌倉よりの宵宿で殊によする紀を人の。和君に對しかくいへばりと无禮なる女子ぞと呵てなんふろもあねども。恋に貴賤の隔なし。苦しき甘しき苦しさハ古き哥にも。へだてなく見国の霄に酒嗾の席へ召出れ君を視しよりも胸の波風凪ぎぞ平生に気を珍さへも。その糸條に逢ふまで思ひ初る恋衣袖も袂もあへずれて濡ぎするてふいせをみ蜑の把泣し貝になりなくに片思ひなる哀しさの。涙ハ夜半のそろ時雨峰の黄葉と命さへ。散なバいかでかのことを人傳なしでまうすべき。嫌いとつゞてもでそかう此まく止つぎと烏滸にも独なめひつめ君ぞびて来りし心裡を隣みかくといひろけて顔をそむけるその在さまハ小萩の花に露のおちて枝たわげる風情あり。朝夷熟視果て忽地わらち笑ひ。陸奥人の物数寄なる吾腑の緒を断しより女にかくも挑まれるハ夢にも更に覚えなし。殊に美人の居膳に召者ならぬ者ハおぼる状まどもよく労り。僞に時直これに對ひて聲すとのる妾に箏弾してといひこれば其方ハ此処の側室なるべし。既にその主ありながら逸早くも他なる人に懸想するとハ水性にありてまづ第一に好ましからぬまき善なく未し所謂ハ及びてもおん[illegible]公の使に立て他の側室と密会なさバ其の罪万死に当るべし。是を第二の障なれ支としも忍びつ。其方の望みを協るとも公用果なバ頓に去るべし。富下倶におひて往まんや。恕心を悩しての益とする所なし。是第三の不祥なり。むとも恋ハ娼しけれども諾ひがたし。夜陰といへど長居となさバ天知地知の理にあり頓て往ねといへ懲

されども猶磐石の動きもなきまで今宣ふまゝ食理のて赤更ふ返ー言べき術
もなく涼ふすむ虫ふあるかなくも吾ゝ悒てゐゝ冷よゝ思ふまでゝち歌ゝ
きて給きゝ。所詮恨ゝあゝ重ねて物ゝ云まゝ然ゝあれども作するゝ。
既ふ主あるゝとゝ。恥くゝもかゝ口説心の底の切るゝ我手人分ゝ一も推量
あゝ賤ゝ伏家ふ育る花香ゝふるゝ深山ふと一枝ゝ折ゝいゝも誰ゝいこれと
雖るべきゝ心強ゝ程のありゝのまゝ帰て往ゝるゝ。空怖もく恥ゝりゝを忍びて
ゝへまゝゝんも懐ゝゝゝゝゝとゝひゝも。縷ゝ絆の袖でゝ拭ゝ赤心水ふ赤心ゝゝれて。
餘ゝ我ゝゝゝゝゝゝゝけゝゝゝ朝夷ハ頭ふも逐ゝ顔ゝも戻ゝて居ゝゝゝ畢竟
朝夷ふ愛情ふゝゝて奸計ふ罹ゝゝ罹らゝゝ次の巻を續て知ゝべー

朝夷巡島記全傳第七編巻之三了

早稲田大学図書館
011888007484